

渋川郷学について

わたしたちの住む渋川には、今から200年から150年前の、江戸時代の末から明治のはじめにかけて、幾人もの優れた教育者が出て多くの子弟を教え導き、郷土の発展のために尽くしました。また教えを受けた弟子たちも、その教えを守り生かし、それぞれの郷土の発展に尽力しました。

その教えは開明的で、小さく閉じこもらず、進んで新しい学問知識に取り組みました。空理空論を排して現実の生活や社会に役立つことを重んじる、実学的な学問・学統で、のちに「渋川郷学」と呼ばれるようになりました。

渋川郷学関係の人びとは、一連の師弟関係で結ばれていますが、各々の主とする学問は漢学、国学、洋学(蘭学)と異なり、たしなんだ芸術も書、漢詩、和歌と様々でした。そして、職業も農業、医者、紺屋(染物屋)、僧、神職と様々でした。師匠たちに共通して言えることは、自分の職業を大事にし全力で取り組んだこと、学問を大切に勉強に励んだこと、詩歌や書道など芸術を大切に励んだこと、そして、世の中や人びとのことを考える人のためになる良い行いをするように努めたことでした。

渋川に生まれ、渋川に暮らし、郷土のために尽力した師匠たちの生き方、考え方、その深い学問などに弟子たちは多くを学び、また感激し、それが「自分も頑張ってみよう。郷土の名誉が失われないようにしよう。」という発奮、努力を続ける原動力になったと考えられます。師匠たちは多くの有能な人材を育て、また、弟子たちは師を大事にしました。今も市内には師匠の遺徳を偲んで弟子たちが建てた顕彰碑や筆子塚が数多く残っています。

「渋川郷学」という言葉は、戦前に渋川小学校長をした田部井鹿蔵がその著述の中で述べたものです。渋川市誌では、「おそらく郷土に根ざした特色ある教育と学問という意味で(田部井は)郷学という言葉を使ったのであろう」とし、渋川市誌文中においては、「郷学」という熟語を持つ歴史・教育史上の意味(郷学=江戸時代の教育機関の一種)を考慮して、「渋川郷学」ではなく「渋川の教学」という言葉、漢字を当てています。本顕彰展パネル解説文は渋川市誌を引用又は参照しているものが多くありますが、過去に開催してきた本事業顕彰展での解説と統一し、全て「渋川郷学」と表記します。

※群馬県史では、『“渋川郷学(きょうがく)”については、特定の教育機関を意味するのではなく、郷土の民衆に対する学問、教育の活動そのものを指すとされている。』と記載されています。 出典：「群馬県史 通史編6」

○引用及び参考文献・・・「渋川市誌第2巻通史編・上」、「まんが渋川の歴史」、「郷土渋川第9号」、「堀口藍園先生物語原稿案(渋川北小所蔵)」



石碑「渋川」(渋川駅前広場)